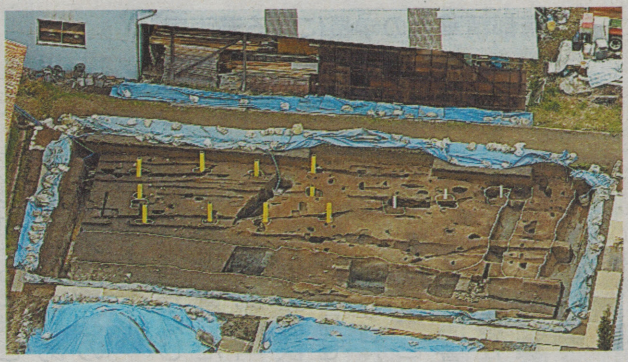
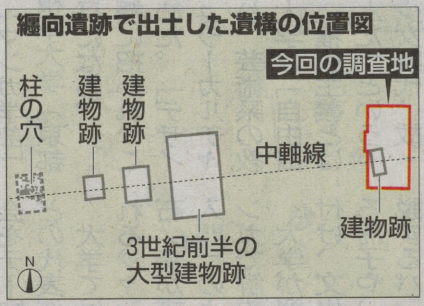
纒向遺跡 新たな建物跡



今回見つかった3世紀前半の建物跡。ポールが柱穴。国内最大規模の大型建物跡はこの30㍍余り西側（写真上の方向）で確認された＝6日午後、奈良県桜井市、本社ヘリから、森井英二郎撮影



女王・卑弥呼が治めた邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の**纒向遺跡**（国史跡、3世紀初め～4世紀初め）＝🔑＝で、2009年に確認された3世紀前半（弥生時代末～古墳時代初め）の大型建物跡の東側から、建物跡1棟が見つかった。市教委が6日発表した。大型建物跡などの建物群と同じ東西の同一線上に中心軸が並ぶことから同時期の建物とみられ、専門家は「この時代では異例の広さ。邪馬台国の中枢施設との見方が強まる」と指摘している。

▼33面＝新たな溝の跡も

遺跡では09年、3世紀前半としては国内最大規模の大型建物跡（南北19・2㍍、東西12・4㍍）が見つかり、その西側の小中規模の建物跡2棟と東西の同一線上に並んで配置されていたことがわかった。

今回確認された建物跡は、この大型建物跡の36・5㍍東側で見つかった。方形の柱穴が10個（一辺40～60㌢）見つかり、東西3・4㍍、南北6・7㍍の規模だったとみられる。

建物群と一直線　邪馬台国中枢説 強まる

石野博信・兵庫県立考古博物館長（考古学）は「東西150㍍の長方形区画の真ん中を貫くように、規格性を持って並ぶ建物群がほぼ確認できた。3世紀ではとんでもない規模の大きさだ」と指摘。「卑弥呼と後継者の台与の2人の女王時代の居館域だった可能性が強まったのではないか」と話す。

現地説明会は9日午前10時～午後3時、JR巻向駅近くの現場周辺で。問い合わせは市纒向学研究センター（0744・45・0590）へ。

（塚本和人）

🔑 **纒向遺跡**

奈良盆地東南部の東西約2㌔、南北約1・5㌔の弥生末期～古墳前期の大規模遺跡。卑弥呼の墓との説がある箸墓（はしはか）古墳（全長約280㍍）など最古級の前方後円墳が点在する。関東から九州まで各地の土器なども出土。自然集落ではなく、人工的に造られた「日本初の都市」と言われる。